

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 31 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22560640

研究課題名(和文) 近世京都の道に関する都市史的研究

研究課題名(英文) Urban Historical Research on Street of Kyoto in the modern period

研究代表者

岸 泰子 (KISHI, Yasuko)

九州大学・芸術工学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：60378817

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、朝廷・幕府・寺社・町・町人などの様々な人々の道の使い方やその目的・背景・意義に着目し、道を中心とした近世京都の都市空間の特性を都市史的視点から明らかにすることを目的とした。成果としては、近世の京都の道は、禁裏・寺社・町・町人といった要素を結節させる重要な場であり、特に禁裏という他の都市にはない要素を包含していた社会の構造的安定と変容を支える重要な場であったことが明らかとなった。この成果は論文としてまとめており、日本建築学会計画系論文集等に掲載されている。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clarify the character of the street and urban space in Kyoto in the early modern period.

As this study results, it was clarified that the street of Kyoto was the important space to link relationships between the Emperor and temples, shrines, "cho" and support the stability and transformation of the social structure with the Emperor and Imperial court. This study-related paper was published in the academic journal ("Journal of Architecture and Planning", etc.).

研究分野：建築学

科研費の分科・細目：建築史・意匠

キーワード：近世 京都 道 都市史 禁裏 町 儀礼

## 1. 研究開始当初の背景

道は、都市の特徴(都市性)が表出する場である。道は、公的空間であると同時に、民衆等の私的・生活空間として古代から機能していた。例えば、中世京都では、道が畠等の民衆の私的生活空間となる「巷所」の形成と衰退が確認できる〔参考文献1〕。このような道の性格の変化が中世都市空間の多様性を示しているといえる。

また、町家の形成に着目した伊藤毅氏は、道の性格の二面性に言及する。ひとつは、街区を囲むという境界性であり、もうひとつは両側町の形成過程において街路を町と称するような中軸性である〔参考文献2〕。さらに、前掲伊藤論文では、中世都市の類型を、都市領主を中核とした重層的な同心円集合「境内」と、道を軸とした線形集合である「町」として捉えている。このように、中世京都の都市空間では、道は町家や町の形成・変遷に多大な影響を与えていただけでなく、都市空間の特性の抽出や類型化において重要な意義を持つことが明らかとなりつつある。

このように、都市における道は、多様な用途・概念を持つ空間であり、都市社会構造の展開・変遷を考える上でもその空間特性を明らかにすることが重要である。しかし、前述のような中世京都に関する都市史の研究状況とは異なり、近世京都のその様相についてはほとんど究明されていない。特に、近世京都の道と町家の関係、道の形成・展開の歴史的背景・概念・意義、道の使い方・管理・文化などに関しては、国内外における先行研究の蓄積は極めて少ないのが現状である。

一方、申請者は、近世の内裏・朝廷研究を進める過程において、天皇の葬送儀礼時における洛中の道の様相を明らかにし、その空間が触穢を表現する機能を果たしていたことを確認した〔参考文献3〕。しかし、ここでも、町側の対応については明らかにできなかった。

また、道においては祭礼を始めとした様々な都市文化が形成・披露されていた。申請者は、都市祭礼時における街路の様相に着目し、民衆が披露する祭礼を天皇が見物することで内裏前の街路は天皇権威を象徴する空間として機能していたことを明らかにしてきたが、そのほかに権威や文化を形成する空間としての道の特性に着目した研究はない。

参考文献〔1〕秋山国三、中村研『京都「町」の研究』、法政大学出版会、1975年。吉田伸之、高橋康夫編『図集 日本都市史』、東京大学出版会、1993年。

〔2〕伊藤毅「町屋の表層と中世京都」『都市の空間史』、吉川弘文館、2003年。

〔3〕拙稿「天皇の葬送儀礼と近世都市京都」『日本建築学会都市史小委員会シンポジウム・都市と建築シリーズ「水平と垂直」』、15-20頁、2008年12月。

## 2. 研究の目的

本研究では、申請者のこれまでの朝廷や祭礼等の研究で得られた成果を基盤としながら、町・町家と道の関係性や、朝廷・幕府・寺社・町・町人などの様々な人々の道の使い方やその目的・背景・意義に着目し、道を中心とした新たな近世京都の都市空間の特性を都市史的視点から明らかにすることを目的とする。さらに、他都市や他時代との比較都市史的な視点も導入し、近世京都だけでなく近世都市の特性の抽出や類型化を試みる。

## 3. 研究の方法

(1) 町・町家の形成・変遷と道の関係性の解明

・近世建築・都市史ではこれまで活用されていない町所有文書や公家の文書等を活用し、新たな視点から町・町家の空間特性を抽出する。具体的には、文書・記録が比較的よく残る上層町人と呼ばれる大規模商家の居住空間や生活空間に着目する。

・道との関係性に配慮しながら町・町家の構成と機能、配置、用途などについて、実証的な検討・分析を行う。

・近世京都だけでなく、他都市の町・町家と比較検討し、近世京都の町・町家・都市空間の特性をより明確化する。

(2) 道の使い方ならびにその歴史的背景・概念の解明

・朝廷・公家・幕府・寺社・町・町人の道の使い方とその背景に着目し、史料から分析を試みる。なかでも、これまでの研究成果を踏まえて、朝廷・公家・寺社が関わる儀礼時等の事例に着目する。対象とする史料は、主に宮内庁書陵部や東京大学史料編纂所、京都府総合資料館等が所蔵・管理する公家の日記、寺社所蔵文書等とする。

・京都の都市空間管理の特性を明らかにするために、幕府や町の動向がわかる史料から道の管理にも着目し、分析する。

・朝廷や公家、社寺だけでなく、幕府や町人らの道への認識、例えば儀礼に用いるべきとされる道や広場と認識される道の存在がわかる事例に着目し、その特性や概念を明らかにする。

・道を使う場合、単一ではなく複数者が使用することから、上記の検討を相互比較し、さらに複合的かつ多様な道の用途・概念を都市史的視点から分析する。

### (3)道における文化・権威の形成とその展開

・道で繰り広げられる事象に関して、文化的要素の形成過程を検討する。また、権力・披権力の表現の場としての道の空間特性を検討する。町や公家等の日記だけでなく、地誌や地図・指図等も幅広く用いて分析する。

### (4)近世京都の都市空間における道の意義

・江戸や大坂の事例とも比較し、朝廷を擁する近世都市社会の特性を都市史的観点から分析する。また、道を中心とした近世都市の類型・特性を抽出することを試みる。

### (5)研究支援データベースの構築

・参考文献・資料・史料・指図・絵画史料の収集とデータ入力を行う。

・これまで申請者が作成した近世公家の日記に関するデータベースに加え、町・町人らの記録のデータベースを構築し、次年度からの研究を円滑かつ効率的に遂行するための準備を行う。

・蒐集した京都の道に関する事象をリストアップしデータベース化する。

・参考文献・資料・史料・指図・絵画史料の収集とデータ入力を行う。

・前年度に作成した日記・記録のデータベース化をさらにすすめ、研究を円滑かつ効率的に遂行するための補助とする。

・ひきつづき蒐集した京都の道に関する事象をリストアップしデータベース化する。

## 4. 研究成果

まず初年度にあたる2010年度は、本研究課題に即する先行研究の蒐集ならびに基礎的資料・データの蒐集・分析を行った。

具体的には、町家と道の関係を抽出するために、上層町人や幕府・朝廷・公家に出仕していた家の文書を調査した。その結果、道を舞台とする祭礼や儀礼が開催される際の町家の使い方を確認できた。ただし、確認できた事例が少なかったため、町と関係する公家・寺社の動向(例えば、祭礼・儀礼の見学を町家で行う公家らの動向)に関する史料蒐集・分析を行った。特に申請者がこれまで蒐集してきた近世初・中期の史料に加え、近世後期の史料も幅広く蒐集した。

また、近世京都だけでなく近世都市の特性の抽出や類型化を試みるため、研究会や学会に積極的に参加し、資料・情報収集や現地調査を行い、他都市や他時代との比較検討の準備を実施した。その結果、近世京都の道の境界装置としての機能が重要であると考え、戦国期に他都市

で構築された惣構との比較・分析ができるよう次の2年目にかけて準備した。

2年目にあたる2011年度には、主に道の管理・建設に着目した。その結果、京都特有の儀礼である天皇葬送や禁裏への還幸時の記録に朝廷や幕府、町側の道の管理や建設に対する動向や認識がよく表れていることを把握した。

さらに、葬送時の道の管理・整備については近世だけでなく中世の事例にも着目することで、近世的特性が中世後期に形成されていたことも把握できた。

そこで、これらの成果を具体的に発表すべく論文執筆の準備を進めつつ、さらなる史料の蒐集・分析を実施した。

なお、近世京都だけでなく近世都市の特性の抽出や類型化を試みるため、研究会や学会での資料・情報収集や現地調査を行い、他都市の事例との比較検討が行えるようにした。前年度に引き続き、近世京都の道の境界装置としての機能に着目し、戦国期に他都市で構築された惣構や京都の御土居等と比較・分析をすすめた。

3年目の2012年度からは、2年目までに蒐集した町や公家らの史料の整理と分析を進めつつ、成果を公表すべく論文を執筆した。

まず、前年度に抽出した対象のうち、還幸時にみる道の特性の解明を行った。安政度の天皇還幸(火災後の仮御所から禁裏(内裏)へ還る儀礼)においては、先行研究でも指摘される特徴のうちの空間に関わる特徴、例えば還幸は天皇側の意図によって実現したこと、その還幸の道筋の決定要因は天皇の「後見越」であること、町側ではさまざまなしつらえや準備を必要とするためにこの準備等を「迷惑」と思わない道筋が選択されたこと、などがあることを再度整理した。そして、本研究で蒐集した史料を用いて、還幸行列の沿道に居を構える町人たちは関係者を還幸見物に接待していたこと、町家ではその接待に準じてしつらいがされていたことに加えて、その接待を通じて社会的交流の場が形成されていたこと、火災後の復興過程において天皇の還幸のためにその道筋にある町家を仮建てもしくは板囲いするなどして道筋の景観が整えられたこと、などを明らかにした。また、比較検討から、このような特性は他の城下町等では見られない京都の特有性であることも明確となった。

さらに、安政度還幸では、還幸の行列とは異なり天皇の清浄性や正統性の象徴である内侍所移徙は町中の道に現れることはないことに着目し、還幸において道で披露されたのは天皇の「イメージ」であることも指摘した。すなわち、近世においては、築地之内という禁裏周辺の区

画の道における儀礼、特に遷幸や祭礼時の天皇・禁裏の動向と同じ儀礼時の都市のなかの道での禁裏の動向を比較検討すると、近世の天皇権威は二面性を有していたことが明らかとなった。これらは、道を中心にして展開された天皇・朝廷と町との交流という特徴だけでなく、近世天皇の存在性ならびに近世国家の特性の解明につながる成果といえる。この成果は、2013年度に「安政度内裏遷幸と都市空間」として日本建築学会に投稿し、論文集に掲載された(5 主な発表論文等/雑誌論文)。

一方、これまでも注目してきた上・下御霊社の祭礼については、道を舞台とする行列に再度着目することで、その意義の抽出を試みた。その結果、道を舞台とする祭礼時の風流行列が、宝永年間に禁裏御所まで入り天皇の見物を伴っていたことだけでなく、そこでは天皇の見物に触れることができる民衆の出入りの道を封鎖し場を限定することで天皇権威がより強調されていたこと、一方で幕府は道の管理をするが道沿いの天皇の見物に対しては積極的に規制をかけないこと、などを明らかにできた。この成果は、2013年度に「近世前期の上・下御霊社祭礼行列と天皇-風流見物を中心に-」として、建築史学会に投稿し、論文集に掲載された(5 主な発表論文等/雑誌論文)。

最終年度にあたる2013年度には、近世という時代性を明確とするために、中世後期に道を舞台として展開された天皇葬列にみられる穢(触穢)という概念の変容過程を考察した。その結果、中世後期の天皇の存在の概念が基本的に近世に継承されることが判明した。これは論文「中世後期の天皇崩御と触穢」としてまとめ、日本建築学会に投稿し、論文集に掲載された(5 主な発表論文等/雑誌論文)。

なお、その後の近世前期の天皇の存在の性格(概念)については、同じく道を舞台とする葬列時の触穢の様相と比較検討することで、よりその性格の神聖性が強化されることを明らかにした(5 主な発表論文等/図書)。

また、町の空間・社会構造を明らかにするために、天皇の葬列の道沿いの町家の様相についても考察した。その結果、葬列用に町人らによってしつらえられた道沿いの空間は、遊興だけでなく商家の結束力もしくは福利厚生、さらには社交の発展のために有効に活用されていたことが判明した。さらに、社会全体からみれば道を主な舞台とした儀礼が実施されることで洛中の借家経営が活性化されるなどの影響があったことも明らかとなった。これは、「天皇の死と都市-光格院葬送を事例として-」として公表した(5 主な発表論文等/雑誌論文)。

以上のように、本研究課題では、道を介して形成されていた多様な都市性を明らかにできた点に成果を見いだせる。特に、天皇・禁裏の権威の象徴の場として道が機能していたこと、しかもその場の性格は築地之内などの禁裏周辺と町中の道とは異なること、一方の町側ではこれらの機能を受け入れ町という共同体を維持・進展させていくための役割を果たす重要な場として活用していたこと、町家などの空間もそれに準じて変容していたことなどは、近世京都の都市空間の特性として位置づけられよう。

そして、これらを総合的にみれば、近世の京都の道は、禁裏・寺社・町・町人といった要素をそれぞれ結節させる重要な場であり、特に禁裏という他の都市にはない要素を包含していた社会の構造的安定と変容を支える重要な場であったことが明らかとなる。この指摘は、近世都市の特性を考える上で重要な成果といえよう。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

岸泰子「天皇の死と都市-光格院葬送を事例として-」『危機に際しての都市の衰退と再生に関する国際比較研究[若手奨励]特別研究委員会報告書』査読無、2014年3月

岸泰子「中世後期の天皇崩御と触穢」『日本建築学会計画系論文集』695、2014年1月、査読有、237-242頁

岸泰子「安政度内裏遷幸と都市空間」『日本建築学会計画系論文集』695、2014年1月、査読有、279-284頁

岸泰子「近世前期の上・下御霊社祭礼行列と天皇-風流見物を中心に-」『建築史学』61、査読有、36-53頁

〔学会発表〕(計1件)

岸泰子「権威と消費-安政度内裏遷幸と町」日本建築学会都市史小委員会シンポジウム「都市と表象」シリーズ「消費と生産」、2012年12月20日、建築会館

〔図書〕(計1件)

岸泰子『近世の禁裏と都市空間』思文閣出版、2014年、320頁

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

岸 泰子 (KISHI, Yasuko)

九州大学・大学院芸術工学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：60378817